The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	香料の源流
Author(s)	山田, 憲太郎
Citation	懐徳. 1952, 23, p. 13-39
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90253
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

香料の源流

山田憲太郎

一、香料起源の年代

香料のことを書いてゐる本の多くは、その始めに、この世界に人類が出現したと同時に匂ひを使つた。だから『匂ひ卽ち香料』の起源は人類の創造とほとんど時を同じくすると、至極簡單にその始めを斷定して、舊約聖書の創世記にあるエデンの花園などを例にあげ、又香料の書物を讀む人もこの點に深く意をとめて考へることもなく、現代の天然香料および化學香料が出現する以前のむかしの香料がきはめて悠久の古代から使用されてゐたかのやうに單純に解してゐることが多い。今創世記を例にとると、舊約聖書のうちこれをふくむモーゼの五書（創世記・出エジプト記・レビ記・民數記略・申命記）はイスラエル民族の古傳說や祭祀の諸法典をふくんだもろもろの記錄を、大體古いものは前九世紀のなかごろ、祭祀の法則については前四世紀以前までに結集して今日我々が讀むやうなものになつたのであつて、エデンの花園は彼等が傳へてゐる一つの說話であり、悠久の古代のイスラエル民族は始めから香料を使用することを知つてをらなかつたのであるが、彼等は彼等より異なつた、そして高く進んだ文化をもつてゐた民族の感化を受けはじめて祭祀の犧牲と供物に香料を使用するやうになつたのである。すなはちイスラエル人の歷史をふりかへるとダビデ王の治政（前一〇一二——九七二年）はエルサレムを宗敎的な中心にしようとした時で、次のソロモン王（前九七二——九二九年）にいたりエルサレムの神殿を完成し、祭祀の儀禮が必要になつたと思はれる。だからヤーウエの

禮拜に香料が供物に用ひられたあきらかな證據はなく、豫言者たちはむしろ無用のこととし、あるひは偶像禮拜に關聯するものとしてその使用を非難し排擊した(歴代志、下・三四章二五、エレミヤ記・六章二〇、四八章三五)ほどであるが、祭祀典に完成された諸法律のなかでは供物として香料は明白に又重要な地位をしめてゐる。これらは大體今日の歴史的事實として認められるから、エデンの花園などを例にして香料の起源を說くのは歴史の事實を無視したものである。にもかかはらず、このやうな考へ方が普通に存在するのは、香料の歴史に對する認識が淺いことと、歴史の研究に於て香料といふ物品の特殊史、もしくは香料といふ物を通じて我々の歴史生活の動く姿を見ようとすることなどがすくないことも手つだつてをるためであらう。そしてややもすると香料を一種の嗜好品にしかすぎないと見なし(――ある點ではそれはいなめないが――)したがつてその歴史もたんなる好事趣味的なものが多く、何故に我々人間が香料をとりあげるにいたつたのか――香料使用の起源――について深く考察するにいたつてゐない。しかし我々が香料を使用することがあるのは否定できない事實であり、ある時代には今日以上に國際的商品としての重要性をもつたときもあつて、東西文化交流上に度外視することのできない商品の一種でもある。かくて過去より現在にわたる使用の事實は、時代と地域により輕重の差はあつても、とにかく人間に香料を必要とする生活のあることを實證してゐる。そしてこの香料を必要とすることがいついかなる因由によりはじまつたかが香料の歴史を考へる者にとつて重要な問題であり、香料使用の起源はここにあると私は思ふ。

次に香料の歴史で問題とする香料そのものにつき一言すると、それは現在の我々が使用してゐる以前の香料で、私は漠然と『過去あるひは昔の香料』といふ言葉を使つてゐるが、わが國を例にとると大體明治(元――一八六八年)以前のヨーロッパ系の香料が入る前に使用した香料である。この昔の香料は自然に產する植物の樹脂・材・根莖・皮・葉・花・果實・種子などの佳香に富むものがほとんどをしめ、動物系統のものでは眞甲鯨の病的結成物であるアムバー(龍涎香)生殖腺分泌物であるムスク(麝香)シベット(靈猫香)、それから特殊な甲殼類の貝殼であつて、今むかしの主

要な香料を地域別に表示すると次のやうになる。

種別＼地域	西南アジア、東アフリカ	インド、ビルマ、セイロン	南シナ、インドシナ、マレイ諸地方
樹脂	乳香、沒藥、蘇合香、ガルバナム、ラダナム、	乳香沒藥蘇合香などの類似品、沈香	沈香、安息香、楓香
材	シプルスのあるもの	白檀	白檀、龍腦、樟腦
樹皮と根(莖)	イリス	コスタス、薑、ベチバー、肉桂、甘松香	肉桂、薑
花	ローズ、水仙、バイオレット、ジヤスミン、ラベンダー	サフラン、梔子、茉利	丁香
葉	ローズマリー、薄荷	香茅	零陵香、薄荷、藿香、艾納香、香茅
果實と種子	アルモンド、コリアンデル、柑橘小茴、香、杜松子	胡椒、小荳蔻、コリアンデル	胡椒、大茴香、肉荳蔻、小荳蔻
動物	アムバー、シベット、貝殼	ムスク、アムバー	ムスク、アムバー、シベット、甲香

この表ではギリシヤより西の地中海沿岸産の香料を輕視してゐるが、昔の香料の主産地としては熱帶アジアの地域が重大な意義をもつので前掲の如くした。又この分類はきはめて平易な常識的な觀點に立脚してゐるから、たとへば龍腦と樟腦のごときは材といふより、むしろ樹脂の項に入れるべきであるが、嚴格な意味の樹脂でもないから材として理會に便ならしめてゐる。これらの香料は天然に採取したもとのままか、もしくは簡單な加工技術(乾燥・煮沸・洗滌・蒸溜・壓縮)を加へて使用し、特異な強い匂ひ——佳香も惡臭もある——を發散すると同時に、消毒—防腐—浸透性

などの薬物的効能を示し、そのあるものは刺戟性の香氣と味をもち、我々の五感のうち主として嗅覺と味覺に、そして觸覺（皮膚の快感）にもうつたへ、熱帶アジア一帶に廣く產したが、個々の香料の產地はこの地帶のある特定の地域に限定されることが多く、又地理的に不便な地方が多かつたから、その發見採取と轉運に今日では想像もできがたい困難と複雜な道程をたどることが多く、したがつてきはめて高價な商品の一種となつてゐた。

加へてこの『むかしの香料』はその生育する土地から出た自然のままの匂ひ、すなはちそれがあるがままの姿に於て本能的に認識使用されるのではなくて、匂ひすなはち香料といふ姿で、我々社會の文化的な生活上の一つの物品として、とりあげ使用するやうになつた時の始めをもつて私は香料の歷史の起源とするものである。たとへばアーリヤ族が前一五世紀ごろインドに移住したとき、すでに廣くインドに先住してゐたドラヴィダ族の言語のうち匂ひと色に關する七ツの言葉が梵語のなかに混じてゐるとキッテル氏（F. Kittel.）はその名著英語カナレス辭典の序文中に指摘し、わが古代史の一資料である古事記や日本書紀にクス・ヒノキ・スギ・カツラ・ハヂカミなど香氣ある植物があり、また「か」あるひは「かぐ」といふやうな匂ひを識別する言葉もあつて（山田憲太郎、日本香料史、昭和二三年、一四—七頁）それらはいづれに於ても匂ひそのものを知り又匂ひに對する感覺のあつたことを示してゐるが、これを以て香料を使用してゐたと解するのは早計である。この場合は人間が本能的に特異な香氣を放つ自然の植物に意をとめ識別したのみであつて、自然にあるがままの狀態の匂ひといふ認識から一歩進んで（香料といふ生活上の一物品としてとりあげてゐるのではない。この區別が香料の起源を考へる上に重要なポイントで、私は人間が本能的に香臭に對する感覺意識のみしかもたなかつた時代を我々のいふ香料史以前の時代とし、我々の歷史的記述と遺物などから社會の文化生活上香料を使用した、そのはじめをもつて香料史のはじまりの年代とし、この起源を考へてゆきたいと思ふ。

二、香料使用の因子

悠久のむかし我々人間のある者は香料となしうるもの（―換言すれば匂ひあるもの―）が自然に産するところにも住んでゐたはずで、彼等はその香氣が虫害をさけ特異な刺戟と味が藥物的効果をもつことを經驗的に知り――卽ち生きることの本能から――利用したのであらう。ところがこの香氣ある自然の産物を香料として我々の生活に使用要求した者は、文化の程度が自給自足の生活からプリミチーブな工業と貿易に依存する生活へうつり、ある種の宗教的儀禮を中心とする域に到達し、その必要品の一つとして香氣に富む物の價値を認め香料として使用したものであつた。だから早く香料を使つた人々は大體香料の原産地域に住んでゐるインドネシヤやアフリカの黑人たちの先住民よりも、むしろ遠い他の地方の高く文化の進んだ異民族であつた。たとへば丁香の原産地であるモルツカ諸島の古い說話を比較的に素朴な姿で記錄した十六世紀はじめのポルトガル人旅行者ジョアン・デ・バロスは『むかしのモルツカの土人は病氣のとき丁香の粉末を額と顏にぬること以外には、それを使用する智識をもたなかつたのであるが、古いころ漢人の入國によつて初めて丁香の何物であるかの智識が生じた。漢人は不足物を土人に與へて丁香を入手した』といふが（岡本良知、中世モルツカ諸島の香料、昭和一九年、八九―九〇頁）この場合丁香を香料として始めて認識した者はモルツカに住してゐた原住民ではなくて彼等よりも高い文化をもつてゐた外部からの來訪民族であつたことを暗示してゐる。もちろんバロスが漢人をもつて最初の來訪者であるとつたへるのは、十六世紀初めポルトガル人がこの島に到達する以前の十三・四世紀ころ漢人がもつぱらモツルカの丁香の轉送にあたつた時代のあつたことをバロス自身が誤り記したのか、モルツカの原住民が漢人渡來以前のことをわすれて話をしたのであつたのかどうかの問題もあるが、それはともかくとしても、漢人が最初の認識者であつたとするのは誤りで、一世紀には當時の知られぬ世界のはてにのみ産した丁香が早くシナ・インド・ヨーロッパにつたはつてをるから、原産地における最初の交易者――すなはち香料としての丁香の價値を知つた者――の一群は正確にはジヤワ人もしくはヒンヅー族あるひはその他の不明のあるいづれかの民族であつたらうとせなければなるまい。このやうな例はその他多々見うけられ、九世紀のアラビヤ人、

イブン・コルダドベーはインド洋のニコバル諸島の住民は鐵と交換するためアムバーをひろひあつめておき、口にくはへて海を泳ぎ沖の船までやつてくると語り（G. Ferrand, Textes relatifs a l'Extrême-Orient, I. 1913. P. 25.）十四世紀初めのアラビヤ人、イブン・バツタは當時セイロン島で原住民は肉桂の價値を知らず、ただ對岸のインド本土のマラバルとコロマンデルの人々がそれを求めてめづらしい衣類を贈與するので、肉桂を山から、伐出し河川によつて海岸に運び積み重ねておくのみであると（Voyage d'Ibn Batuta, C. Deferemery et C. Sanguinetti. 1853—58. IV. P. 99.）つたへるごとくである。又林邑記（水經注、卷三六所引）にインドシナの朱吾（洞海 Donghoi）以南に文郎野人（モイ族の Bahnar か）が住し、彼等は野に生活して居室なく、樹上に寢るところをいとなみ魚肉をなまで喰べ沈香木を採取することにつとめ、他國人から必要物をもらつて生活してゐると、東方における沈香木原産地方の採取と取引の一狀態を記してゐる。實にアラビヤン・ナイトの一節に

砂金も土よりほり出されずば塵にひとし
沈香の木もその生えしところにてはいとやすき薪にすぎず
黄金は山より堀り出されてぞいと高き價を得べく
沈香の木は外つ國に送られてこそ黄金より貴きものを

と歌つてゐるやうに、自然に産する匂ひは、その眞の價値の認識者、すなはち香料としての使用をまつてこそ、はじめて我々の問題とするところのものとなるのであつて、祭祀を中心とする集團生活が成長して異域のめづらしい物資を求めるにいたり香料を必要とするのである。

かくて香料を産する熱帶アジアの各地に早く移住し、あるひは交通したやや高い文化をもつた民族——香料原産地の住民と比較して——は特異な香氣と刺戟と味に富むものを彼等の生活に使用することを考へ、あるひはそれを要求する他の民族に供給し中間の利を占めることによつて自己の生活をやすからしめようとしたのである。そしてこの香

料を必要とした古代の民族はまづ神や天をまつる祭祀の儀式にもつとも早く佳香のあるものをささげ、同時に人間の必然的な事實である死といふものの一原因である病氣怪我などの治療にも藥物として使用したと考へる（私は藥物としての香料と、匂ひとしての香料本來の用途と、どちらが先であつたのか斷定を下し得ないが本稿では香料本來の用途のみから論を進めたい）。だから

(一) 香料を火に投じ、發する薫煙の馨香に大きな偉大なもの—神や天—の祝福を願ひ、動物を犧牲に供する原始的な供物の惡臭をさけるため佳香のある物を加へるやうになつたのであつて、古代エジプト十一王朝（前二一六〇——二〇〇〇年）Mentuhotep IV. 代に家畜と山羊をほふり乳香を火中に投づとあきらかにその用途を明示し、大體前一二二五——一二一五年ごろエジプトの Merneptah 王のころにエジプトを脱出した一群のイスラエル人（——古代エジプト資料中イスラエル人のことはこのとき始めて出てくる Breasted, Ancient Records of Egypt, III. p. 603—605.）の記錄であると見なされる出エジプト記（三〇章一——九）は香料を焚く壇をネムの木で作る形式と法則を説明してエホバの前に朝夕かならず香料を焚けと規定し、その香料は肉桂・沒藥・ガルバナム・貝殼と乳香に鹽を加へ、こまかにつきくだいて使ふ（同書、三〇章三四—三六）と語り、古くは犧牲に供する動物を屠殺しあるひは獻ずる場所であつた壇が香壇に進化したことを示し、イスラエル人がエジプトの進んだ文化に接して香壇を供へるやうになつたものと推定される。かくて香料を焚くことは祭祀の重要儀禮の一つとなつて焚香（Incense）の原流が認められる。

(二) 祭祀のささげものである酒類や食物の美味と刺戟とながもちを欲することも當然おこることであつて、香料のうちのあるものがこの目的に最適することがわかると、それを賦香しようとすることは當然の成行で、レビ記（二章一—三）はエホバに供へる素祭の禮物は麥粉に油と乳香を加へ火祭として供へ、そのあまりを食すると說き、前四・三世紀ごろのシナの楚の地方の歌集——或はそれ以前の湘江民族の宗教歌舞であらうか（胡適文存・讀楚辭・參照）——である楚辭の九歌東皇太一篇と東君篇に桂酒と椒漿をまつり桂酒を飲むとあつて、桂を酒に浸し椒といふ香氣ある植物

を漿といふ飯汁に入れ、祭祀の時に用ひてゐるが、この桂が今日我々がいふところの廣東廣西地方からインドシナにかけて產する肉桂ではないとしても（山田、東亞香料史、昭和十七年、四四頁。藤田豐八、東西交涉史の研究、南海篇、六〇四—五頁）シナでは樟科系植物は南部から中部にかけ廣く分布してゐるから、それらのうち比較的に肉桂に近い香氣と味と刺戟のあるものを用ひたと解してよからう。かくて味覺からくる快感は食慾をそそり、飲食品の保存と防腐をかね、味覺と嗅覺からくる刺戟と味は寒溫帶地方では身體の保溫に、熱帶では暑氣をさける効能を示して調味賦香料（Spices）が登場してくる。

㈢　身體を淨めて神や天を拜することから、香氣あるものを身體にぬり、或は身に佩び、香氣ある水や湯に俗し、さらに香氣を吸收させた油脂を塗布するやうになるが、溫熱乾燥地域の人々には體臭がきはめて大きな問題となつて香料を身につけることになる。出エジプト記（三〇章二三）は沒藥・シンナモン・カツシヤ・カラムスをオリーブ油に入れて「にほひあぶら Anointing oil」を作ることを敎へ、ホーマーのイリアツド（二三の一八五・土井晚翠譯・イリアース、昭和十五年、一〇五四頁）はヂユウスの女神がアムブロシヤ・ローズを賦香した香油を死體にぬることを歌ひ、後代の書であるが宋の法雲（翻譯名義集・衆香篇）は香料は元來穢れを去るものでインドは熱國であるから身體に臭氣をもちやすく、香料を塗つて佛法僧に奉仕すると、インドにおける香料使用の一面の因由を說明してゐる。かくて化粧品（Cosmetics）としての香料の使用は體臭を消し皮膚の衞生的快感を樂しむ事實にも起因してゐるが、この場合香料を自然に產したそのままの姿——あるものは乾燥してゐるが——で使用するのは粉末にしてぬるか、或は香料を浸した水や湯に浴するくらゐで、多くは香料を植物の油や動物の脂肪に浸し、この油脂自體に香氣を吸收させたものすなはち「にほひあぶら」を使用したのであつて、この技術は古代のエジプトでミイラ製造のさい仕上げの化粧に使用したことがはじまりのやうで、ルーカス氏は大體第十二王朝（前二〇〇〇—一七八八年）のころかと推定してゐるが（A. Lucas, Ancient Egyptian Materials & Industries, 2nd, Ed. 1934. P. 251-257.）、かくして香料そのものの

匂ひのみを油脂體にとらへる技術と製品が生れ、前四・三世紀のギリシヤのテオフラスタスはこの製造技術について詳細に説明し(Theophrastus, Enquiry into Plants, trans. by A. Hort. II. p. 326-389.)西洋における香料使用の技術が自然の香氣すなはち匂ひをいかに便利よくとらへ使用するため科學的な考へ方を重ねて現代の香料へ移るにいたつたかの因由を知ることができる。

以上のやうに焚香・調味賦香・化粧の三部門にわかれた香料の使用は、ある一つの進んだ文化の階段に達した民族の要求によつて我々の歴史に登場したものであることがわかると思ふが、今この使用別に主な香料をわけて見ると次表のやうになり互ひに共通して使用するものもあるし、又時代と使用した文化圏の相違により一つの香料に對する主用途にも變化があつたことはもちろんである。

	第一次的に	第二次的に	共通に
焚香料	沈香、乳香、沒藥、安息香、蘇合香、白檀、松柏類龍腦、楓香、零陵香、藿香、甲香	丁香、小荳蔻、肉桂、ベチバー、大茴香、甘松香、香茅	麝香、龍涎香、シベット
調味料	胡椒、丁香、肉荳蔻、小荳蔻、薑、肉桂、大茴香、小茴香、柑橘、コリアンデル、アルモンド、杜松子薄荷	龍腦、乳香、安息香、ジヤスミン、水仙、サフラン ローズ	
化粧料	龍腦、白檀、イリス、ベチバー、甘松香、ローズ、ジヤスミン、水仙、サフラン、香茅	沈香、乳香、丁香、沒藥、零陵香、藿香、肉桂、小荳蔻	

そして前表をよく見ると、(イ)焚香は樹脂系香料 (ロ)調味賦香料は果實と種子・皮と根 (ハ)化粧料は草と花 を主體としてゐることが理解される。また上記の三用途以外に、たとへば古代エジプトのミイラの製造原料として死體の防腐賦香料に、東方では佛像の粗材あるひは仕上げの塗料中に、もしくは東西を通じ種々のぜいたくな調度品などに廣く使用してゐるが、それらはいづれも香料としては派生的な用途にしかすぎない。

なほむかしの香料は同時にほとんど藥物として用ひられ、香藥といふやうに、藥物と表裏一體をなしてゐるが、むかしの藥物が、(イ)薫煙で患部を淨化する、(ロ)口中より服用する、(ハ)身體の外部に用ひる、の三つにわけられるのと同一である。それから香料自體が人間の神經を刺戟しあるひは安靜にする事實は佳香の快樂に人をみちびき、媚藥としての香料の有する役割は——その使用法は前記の用途による——崇高な精神的な匂ひとともに、これまた表裏一體をなして、わすれることのできないものであり、文化が高まり異文化との交渉が深くなると、そのときどきの文化の荷擔者にとつて香料は彼等の生活の必要品と目されるやうになつてくる。

二、主要文化圈の香料の使用

ユーラシヤ大陸に於て定着した人類の生活文化圈はインドより以西では、まづナイル河と地中海東部地方からシリヤとイラクを横斷してイラン高原とインダス流域におよぶ半乾燥地帶のところどころにはじまり、漸次集團的な都市生活へと進んだのであるが、香料の歴史として私は、(一)エジプトに發するものから西洋へ、(二)インダス河よりガンガ流域にわたるインド、(三)中國、の三つの文化圈を中心に考へて見たい。

(イ) 古代のエジプト文明がはつきりいつごろから香料を使ひはじめたのであつたか、正確な年代は不明であるが考古學者は第五王朝（前二七五〇—二六二五年）代の香爐の存在を立證し（H. Frankfort. The Cemeteries of Aboydos; Works of the Season 1925-6. Journal of Egyptian Archaeology. XVI (1930) P. 127.）又同王朝の Sahure 王（約前二七四三—二七三一年）のとき紅海南端のソマリーランドとその對岸のアデン一帶と思はれる。プント（Punt——ソロモン王が遠征隊を出したと傳へられる Ophir もこの地帶であつたらう——）に航海して沒藥 80,000 measures 金銀鑛 6,000 weight 象牙 2,600 staves を求めてゐる（J. H. Breasted, A History of the Ancient Egyptians. P. 114-5. Breasted, Records. I. 161. 8.）から前廿八世紀代には大體確實に香料を使用し焚香料として神にささげ

てゐたと考へて誤りがなからう。そしてプント地方は以後永くエジプトとそれにつながる西方諸地域に對する香料供給の資源地と目されたが、早くも前二六・五世紀すなはち Pepi. II（前二五六六—二四七六年）のころにはプント遠征が活潑に行はれ（Breasted, History. p. 127. Records. I. p. 361.）いかに香料を求めたかがわかる。また香爐は後に柄のついたもちはこびに便利でどこでも焚けるやうに進化し二十一王朝（前一〇九〇—九四五年）のパピルスに描いた女人が供養をしてゐる圖に柄の香爐をもつて香料を焚いており（松本文三郎、東洋文化の研究、大正十五年、圖八、G. Rawlinson, Herodotus, 1885. II. p. 88. n.）焚香使用の盛行を如實に示してゐる。それからスパイスに屬するものとしてはシンナモン cinnamon が十八（前一五八〇—一三五〇年）十九（前一三五〇—一二〇〇年）王朝代にプントの產として知られてゐたことは有名な Hatshepsut（前一四八一—一四七九年の間に死す）大后のプント遠征を記念した浮彫にプントの寶の一つとしてそれらしいものが描かれてゐることにより證明され、カッシヤ cassia の名は二十王朝（前一二〇〇—一〇九〇年）代に記されており（A. Lucas. p. 239-241. Breasted, History, p. 218-9.）この兩者は肉桂に屬するもので正確な產地はインド・マレイシヤ・南シナとインドシナの地方でインドより以西の地域にはどこにも產しないから、當時は大體主としてインドに產する肉桂がシンナモンとカッシヤといふ商品上の區別をもつてペルシヤと西南アジヤを經由してアラビヤ半島の南部地方に集まつたものであらうとしか考へられない。（山田、東亞香料史、東西交涉史上の肉桂。Schoff. Periplus. p. 82. n. Breasted, Records. IV. 234. 344. 379.）ところが古代ギリシヤのヘロドトス（前四二五年ごろ死す）テオフラストス（前三七〇—二八六年か）ローマのプリニー（二三—七九年）の時代でも地中海方面ではアラビヤ人やソマリーランド人によつて肉桂の產地は彼等の住む地方——すなはち古代エジプトのプント——であるとされてをり（村川堅太郎、エリニトウラ海案內記、昭和二一年、一四二頁）ヘロドトス時代前後の肉桂は大體今日吾々がいふところの肉桂（樟科形に屬する）であると考へられるが、前十六・五世紀代にプトンより傳來しエジプトで使用した肉桂が正確にインド產であつたのか、ソマリーランドを中心とする地帶にあるひは味覺の快をそそる近似のある

植物が存したのではなかつたらうか、またシンナモンとカッシヤの區別はインド産肉桂の品種的區別ではなくて、あるひはそのいづれかが肉桂に近似する他の香料であつて、その名稱があとで肉桂の品種區別名に流用されたのか、永年代にわたつて肉桂その他樹脂香料の西方への供給を支配してゐたアラビヤ南部サバ人の肉桂に對する詳細確實な説明などを知らないとこれらの問題はときがたく、依然として疑問であるとなすほかなく、私は他日の考究にゆづりたい。ともあれ古代エジプトの肉桂はスパイスとしてまたインセンスとミイラ製造の死體賦香料と化粧の一種(mummification)などに供してゐたとするのが穩當であらう(Lucas, p. 240.)。最後に化粧料としての香料の使用はミイラの製造にあたりその仕上げに香膏をぬることなどにはじまり、その正確な年代については相當疑問の點もあるが大體十二王朝(前二〇〇〇—一七八八年)ころかとルーカス氏は推定してゐるが新王朝(前一五八〇—一〇九〇年)代の香油 unguent を運ぶ人像の遺物(ルーブルとリバープール博物館藏 J. Capart. Egyptian Art. 1923. P. 63. 64.)などから見て、この時代には相當使用してゐたと思はれる。しかし日常の化粧料として廣く普及したのはプトレマイオス王朝(前三二二—三〇年)とローマの盛時のやうでテオフラスタスやプリニーにより十分説明され、苦扁桃油・オリーブ油・カーダモン・蜜・ワイン・沒藥・ガルバナム・ターペンチンなどを原料とし、製品にも多くの種類のあつたことはプリニーの書(Naturalis historiae. Lipsiae. 1875, XIII. 1-2.)にくはしい。

かくのごとき古代エジプトの香料の使用は小アジア地方の古代國家群にも同じであつたらうと推定され、バビロニヤ、アッシリヤそしてシリヤのフェニキヤ商人の如きは香料の轉運に努め、ペルシヤとギリシヤの對立時代にペルシヤ王ダリウス一世(前五二一—四八五年)の廣大な遠征によりインドの胡椒が廣まつた事實もあり、ヘブライ民族の記錄などから記さねばならないことは多々あるが、現在の私はオリエント地帶の香料使用全體の流れについて簡單に系統づけることができないから本稿では、エジプトを中心にこのやうに發展したオリエントの香料の流れが古代のギリシヤ・ローマに傳はつたものであるといふにとどめたい。

(ロ) 古代ギリシヤ・ローマと中世以後の西洋との間に中世のアラビヤ人回教國につきいささか記しておかねばならない。前述したやうに彼等の鄉土とくにその南部と對岸のソマリーランド一帶は樹脂系香料の原産地であり又東方の諸香料の仲繼供給地であつて、古代エジプト時代から一世紀のローマ隆昌時代まで、一般にはあらゆる香料の原産地であると信ぜられたほど、アラビヤ南部のサバ人により香料の供給權がにぎられ、その他アラビヤ各地のセム系の各民族に就ても同じことを言ひ得るが、古代の彼等は大體香料を自分で消費使用するのではなくて、彼等より西方の各文化民族に供給することにより（――この供給は平和的と戰鬪的な、あるひは兩者を混じた形式をとる――）彼等の生活滿足を容易にはかり得たのであつた。ところが六世紀のマホメットにはじまる回教國となつてからは東西兩洋の香料取引を獨占すると同時に彼等自身香料の大消費者として全く異つた姿を示すにいたつたのである。卽ち流砂の中に住み、自然を恐れぬ、自然と對立した彼等の生活は超現實的戰鬪的熱狂的とも言ひ得る性格をきづきあげ、香料はレヂン・バルサム系の粘稠なかほり、ムスク・アムバーグリス・シベットの如き動物性の强い香に、あくことのない情愛の世界にひたるかと思へば、この反面靜的なつめたい龍腦の匂ひの泉に精神的な渴をいやしてゐる。そして樹脂系香料は焚香を主體としてどの文化圈にも使用され、一見各文化圈の使用の特徵を示さないもののやうであるが、こまかく見るとアジア地方では沈香木を中心に（後記するインドとシナの部參照）暗い澁い淸澄幽玄な香木の佳香を愛し、西南アジアと西洋では乳香沒藥など樹脂系の甘美な匂ひを好み、乳香卽ちインセンスであるとみなし、たとへばイザヤ書（六〇章六）は黃金と乳香を、マタイ傳（二章一一）は賢者がキリストの生誕に乳香と沒藥をささげた話を傳へるが、この場合、乳香は神・沒藥は神の子キリスト・黃金は現世の王・に比定されて（この區別と比定はペルシヤ系の傳說的考へ方でもある（Schoff. Periplus. p. 123.）乳香が最高至上のものと見なされてゐるほどである。そして西洋とアラビヤの區別は保香的効果の高いアジアの動物性と數種の植物性香料が乳香系樹脂のあるものにまさるものとして、彼等より深く廣く東方より轉運され消費され西洋へ紹介された事實によつて證明される。ムスクはヒマラヤの

山岳地帶からシナの雲南にかけ產し、ヒンヅー族や漢民族と古いつながりをもつてゐるが、それは香料としてよりも無比の高貴藥としての存在の方が强かつたのに、回教徒は之を香料として廣め食品にまで賦香するにいたつた次第である。アムバーグリスは彼等が古くから親しみをもつてゐたラブダナムの香氣にまさるものとして、始めて彼等の南部海岸に發見され、彼等の東西兩洋に對する急速な海上發展に伴ひ、インド洋の各地にすみやかに廣く發見されるやうになつて、あらゆる香料の用途に供され、保香的効果の絕大なこの匂ひは彼等の性狀と合致して、古代のエジプト・西南アジア・ギリシア・ローマに見られた香料使用とは異なる一つの性格を樹立した。

又彼等の商人的性格はその海上發展によりいかんなく發揮され、香料の東西交流は彼等によりとくにその前の時代よりも急激に深められ、中國宋代のアラビヤ乳香の需要はおどろくばかりの事實となり（宋史食貨志）龍腦は彼等が最初は鹽とまちがへたにもかかはらず彼等の消費を中心として西洋に廣まり、近世の初めその代用品として中國と日本に樟腦の製造を促すにいたり、インドの胡椒の主產地であるマラバル海岸は香料海岸とも稱され、モルツカ諸島の肉荳蔻（ナツトメツグとメース）は――同地の丁香が紀元前後から東西に傳つてゐたにかかはらず――漸く彼等により轉運された有樣で、インド本土と南海フロレス群島の白檀の西方傳播についても彼等によりいちぢるしく量を增したといふことができ、そして東方一帶にさかんに用ひた沈香木をも彼等は多量に使用し、沈香・白檀・アムバーグリス・ムスクを混じて香爐でふんだんに焚くと明初の瀛涯勝覽はその消息をつたへ、香料史上彼等は特異な一つの存在であつたことがわかる。さらに彼等は古代ギリシヤの自然科學智識を擴大補足することによりその自然征服慾を充足しようとし、香料の面では植物體內の香氣分のみを水蒸氣蒸溜技術により捕集する西洋近世の植物精油（Essential oil）の出現に大きな功績を與へてゐるが、彼等のあくことない商業利潤の追求は原產地における商品取得の祕密性を深め自然科學的成果は西洋の古代と近世のギヤップをうづめ充足する程度以上にはあがらず、彼等の特異な文化はその政治的勢力の消失とともに流沙のなかにわすれられ過去のものになつてしまつた。

(ハ) ナイルの三角州と西南アジアに發した古文化――すなはち西洋人のいふオリエント――に深い影響を受けて成長したギリシヤの多島海文化はやがてイタリアのローマにおよんで今日のヨーロッパ文化世界をきづいた。西洋の合理性を中心とする生活環境は自然に産する香料の香氣分のみを考へ愛し、香氣分卽ち匂ひのみを實體的にとらへてゆく、自然に産したもののなかから匂ひだけをつかまへて使用する考へ方――自然の匂ひを人間との對立關係におき、匂ひを人間の生活に從屬させる――に發し、香氣分のみを捕集する技術が早くギリシヤにあつたことは旣に記したとほりである。なほ油や脂肪を媒體としてそれに花の匂ひを吸收させポマードとして匂ひを樂しむことは彼等元來の體臭とも深いつながりをもち、オリエント古文化地帶に發したのであるが、西洋ではこのポマードから――現代に入つてからではあるが――匂ひ卽ち香氣分だけを再度捕集するやうな技術的因子を生み、それが成長實現された事實は西洋の香料使用に見のがすことのできない一性格である。また都市生活とそれを中心とする牧畜にはぐくまれた生活は牧草の匂ひに親しみをよせ、彼等の住む自然と風土は草花の成長をたやすからしめ、ローズ・バイオレット・リリー・ヒヤシンス・ラベンダー・ジヤスミン・ペツパーミントの如き花の匂ひを愛し、花そのものの自然に咲く姿よりも色と匂ひそのものに深い愛をよせ、彼等の目的とする匂ひは――匂ひの原料とするものがレヂン・バルサム・動物性・その他なんであつても――結局に於て彼等の生活に親しみのある花の匂ひにあるかの如き觀を呈し、この匂ひにあかるいロマンチシズムをいだくとともに、その香氣をいかにしてリヤリスチックに捕へ使用するかをわすれてゐない。

ローマ帝國の國力が充實して平和な姿が確立し、ギリシヤ商人が季節風を利用して盛んに紅海からインド洋に航海するやうになつてローマ人の生活は東洋の物資を異常に求めるようになつてくる（E. H. Warmington, The Commerce between the Roman Empire & India. 1928.）が、彼等の必要とした主要香料は○インセンス――乳香・沒藥・インドの類似品○アンギュエント（コスメチックス）――スパイクナルド・レモングラス・ジンジヤグラス

・コスタス○スパイス――胡椒・ジンジャー・肉桂・丁香・などで、乳香（焚香）スパイクナルド（化粧）胡椒（調味）の三つで代表されてゐる。今焚香料と化粧料については記述を省くが調味料としては肉桂がもつとも古く、胡椒は紀元前後より急に流行し、當時インドの東海岸よりローマに轉運した貨物の四分の三は胡椒であつたとさへ言はれ、プリニーは胡椒が我々の日常食物の調理に缺くことのできない理由は、その特有な辛味の食慾をそそることを助長する偉大な點にあると言ひ、これを飲食品に利用することを發見した者は誰であつたらうかとまで記してゐるが（Naturalis Historiae. XII. 7.）胡椒の特異な香氣と刺戟と味が彼等の食品の保存と味覺的効果を大にするのに有効であつたからである。又モルッカ諸島に原産する丁香は八世紀以後廣く西洋に流行し、十一・二世紀以後ヨーロッパの藥店は丁香を常備し一般都市生活者も王公の家の如くこれをもたぬのを恥としたほどで上下の階級を通じもつとも嗜好され、牛肉・腸詰・葡萄酒その他廣く飲食品の調味賦香に用ひ、胡椒の二ないし三倍の高値をよんでクローブ最盛時代を現出したのであつた。（W. Heyd, Histoire du Commerce du Levant au moyen-âge. 1923. II. P. 603.）

次にさきに記した中世のアラビヤ人の蒸溜技術であるが、之は古くヘロドトスとプリニーにも記され、ヂオスコリデスの藥法書（七七又は七八年になる）にターペンチン油とその製法があり、中世のアラビヤ人により技術的經驗を重ね、ヨーロッパにその技術が知られるやうになつたのであるが、草花を水蒸氣蒸溜することにより、草花の匂ひのみを捕集したいはゆる今日の植物精油がヨーロッパに出現したのである。これは植物の各部分（枝葉・根莖・木皮・樹幹・果實・花・樹脂など）から發散する匂ひはすべて揮發性をもち、水蒸氣蒸溜によつてその匂ひ分だけをおひ出しとらへることができ、この匂ひ分は油脂のごとくべたつかずおほむね液狀を呈し水より輕い性狀をもつてゐるので、植物の匂ひの精といふ意味から植物精油と稱し油脂と區別するものである。しかし精油の出現は蒸溜技術がよく廣まつてからのことであつて十三世紀から十五世紀にかけローズ・ラベンダーを始めとして多くの精油が製造されたと言

はれるが（E. Gildemeister u. Fr. Hoffmann. Die ätherischen öle, I. 1910. p. 41-66.）大體確實には十五世紀末から即ち十六世紀よりのこととするのが妥當であらう（E. Guenther. The Essential Oils. I. 1948. p. 1-7.）。かくて香料即ち精油であるとする時代になると古代から西洋にも焚香料の主體であつた樹脂系香料の價値は弱まり香料を焚くといふことが一部の限られた宗教儀式などに僅かにその名殘りをとどめる次第となつた。精油が出現する以前に於てはコスメチックスとして油脂體に香料を捕集する以外に香氣捕集の技術はなく、香料を火に投じ香氣を樂しむことが、匂ひの使用に大きな分野を占めた。――それは一般生活上における宗教的役割をわすれることもできないが――そして樹脂系香料だと比較的長年月にわたり原料のままで匂ひを保持し、かつ火熱とよくマッチして匂ひを發するから、樹脂即ち焚香料となつてゐたのであるが、火熱による煙氣はさけられず、精油が出現すると焚香料はその地位を失つてゆくのは當然である。かくて近世のヨーロッパ人は古代と同じく東方の香料資源を使用しながらも、それを原料として精油を製造し、自然の意外な變化に左右されることをすくなくして香料（匂ひ）を使ひ得る狀態に近め、安く大量に精油として匂ひを生産することになり、香料の使用範圍を擴大し、揮發性の高い精油に中世のアラビヤ人により敎はつた動物性香料や白檀・龍腦のやうな重厚な保香劑的効果をもつ香料を使用することによつてフアンシーな花の匂ひをたやすくつくることに成功した。そして十九世紀に入ると多量に産する植物精油からその主成分を抽出して、天然の高價な匂ひに代るものを安くつくり、さらに今日の化學（合成）香料を生む因子を形成するにいたつた。

(二) 香料の原産地として主要地域の一であるインドの香料の使用は大體いつごろからであつたのだらうか。諸々の佛敎敎典には香料のことがすこぶる多くあげられ、ジヤイナ敎の始祖耆那（前五九九―五二九年）と佛陀（約前五六三―四八三年ころか）が住んでゐた前六・五世紀ごろには廣く香料を使つたことは大體事實で、職業の一種に香料商のあつたことも認められてゐる。又アーリヤ民族の古語であるサンスクリットには香料の品名がすくなくなく古代から香料を使用したものかと速斷されがちであるが、サンスクリットもその成立年代を考へねばならず、漠然と早く古代からあ

つたとするのはつつしまねばなるまい。それからインドの二大史詩であるラーマヤナと前一三〇〇——一〇〇〇年ごろのできごとをも傳へてゐるといふマハーバラータには香料のことが記されてをり、それより古いアーリヤ人の歴史をうかがひ知ることのできるベーダといふ一群の宗教的作品のなかにも溯及し得るのであるが、それらに殘る香料の各々が大體いつごろからアーリヤ人の生活にとりいれられてゐたのか、正確な年代の推定は仲々できがたいのであらうと私は思ふ（香料史の研究上シナと西洋の資料には見るべきものが多々あるが、インドを中心とする地帶に缺くるものがあるのは事實である）。ベーダのうちの藥法書であるアエルベーダは古代より傳承されたものが一世紀末から二世紀の始めにかけてチヤーラカにより集錄されて植物のあらゆる部分や分泌物を利用し、コリヤンデル・カーダモン・沈香・バレリヤン・肉桂・ベチバー・サフラン・蘇合香・レモングラス・白檀・ジンジヤーグラス・パルマローザ・その他多數の香料に屬するものと目されるものがあげられてゐるが、その各品が正確にいつごろまで溯及して各々個別的にその使用起源が確認し得るのであらうか。現在の私にはとてもできがたいことである。私はアーリヤ民族がインダスの河邊から東の方ガンヂスの流域へ進出し種々の文化を釀成した前一四〇〇—一〇〇〇年代の終りごろ、すなはち宗教的諸儀式が複雜となつて祭祀の役にあたるブラーマン階級の成立した以後のころに香料を使用するやうになつたもので、二大史詩やアユルベーダに諸香料の名稱がある所以もここにあると思ふ。そして例へば沈香はインドではガンヂスの支流ブラマプトラ河より以東の一帶に主として產し、アーリヤ民族はガンヂスの平原に近いアツサムの山岳地帶から始めて沈香を知つたと推定され、その年代はおほよそ前記のころであつたとするのが妥當であらう。それはアーリヤ民族が前一五〇〇年ごろヒンヅクシュ山脈をこえて南下しインダス河上流の五河地方に侵入したいはゆるベーダ時代の彼等の生活は農耕生活が中心で、雨の神であるインドラを崇拜し一種の植物釀酒である蘇摩酒を獻じ、その他種々の神を拜したのであつたが大體自然崇拜の域を脫せず香料を使用する文化段階には到達してゐなかつたと想像するからである。即ち私はインドにおけるアーリヤ民族の社會生活の內容の變化をめやすに私の推定を

下してゐるのであるが私のこの地域における智識はきはめて淺薄であるから、その推定に大きな不安をもつことを卒直に告白する。

かりに右のやうに前十世紀域はそれを溯るほど遠からぬころと推定するアーリヤ族の香料の使用はペルシヤとオリエント諸地域の香料使用と一連のつながりがあつたものかどうか、アーリヤ人はアーリヤ人として獨自の發明によるものか、それとも私の推定（假説）より古くアーリヤ人が香料を使つて、彼等が香料使用の源始をなしたものか、それとも反對にアーリヤ人はガンヂス平原に入り、ペルシヤ・オリエント文化民族の文化的影響を（間接に）受けて香料を知つたものか私にはわからない。又アーリヤ民族より古く前三二五〇――二七五〇年にかけて――インダス下流のモヘンヂョダロやハラッパに見られる――インダス文化時代のあつたことが知られ、西南アジアのスメル文化とも深い關係をもち、遠隔の地よりもたらした藥品や南インドの Amazon-stone を用ひ、香料を入れたと見なされる容器と思はれるものがあるとも報告されてゐるが、このインダス文明民族が正確に香料を使用したことがあつたのかどうか、又かりに使用したことがあつたとして、彼等がほろびて別種のアーリヤ文化がこの地方に點火されるまで大凡千五百年の末詳の暗黑時代をどう解すべきものか私には一切わからない。だから西南アジアとインドをむすぶ古代各民族の明確なる香料使用起源に就ては私はわからないとしか答へられない。簡單又は單純に香料の使用は中央アジアから西南アジアにかけての古代文化民族にはじまるとする一元的な考へ方が多くの香料書によく見受けられるが、それは實はわからないことであるとしか私には答えられない。たとへば前十六世紀ごろプント地方を經て古代エヂプトに傳つた肉桂が實際インド產の肉桂であつたとすれば、その主產地は南インドのマラバル地方と北部ヒマラヤ南部地帶であつたと推定されるから當時これらの地方の住民が肉桂の價値を知つてゐたかどうかが第一の問題となり、かりにまだ香料としての價値を知つてをらなかつたとすれば、中インド或はインダス河畔の民族がその價値を知つてをり、彼等の手を經て西南アジヤを通じ古代エジプトへ入つたのか、或はインダス地域の民族もその價値を知らず、西南ア

ジアのある古民族がその價値を知り、産地にいたる間の中間の諸民族はインドの肉桂を運べば自己の欲するものを手に入れることができたので、それを運ぶことに意をとどめたのか、サンスクリットにはシンナモンとカツシヤに該當する言葉がないやうでこの解釋は疑問として殘しておくよりほかにみちなく、又それがどうしてアラビヤ南端の一地方に主として集散されたのか疑問は疑問を生むのみである。もちろん前四世紀後半のアレクサンダー大王のインド侵入前後からのことは大凡の狀態が前代よりも了解しやすいことが多いので肉桂・胡椒・甘松香その他インド産諸香料の西方傳播に關し古代ギリシヤ・ローマの諸資料と對應しておぼろげながらあきらかに推定することができ、インド自體の香料の使用が比較的に穩當な推定のもとに立論し得ると私は考へる。

(ホ)　東方における香料の大消費者は漢民族である。ここでもかつてブレットシュナイダー氏が中國の本草書を歐米に紹介し（E. Bretschneider, On the study & value of Chinese Botanical works. 1870.）神農本草經を前二八世紀ごろの神農の作といふ傳說を無批判に記したため、本經にあつたと傳へられる香料がすでに古代からシナで使用されてゐたかの如き考へ方を生み、一般に中國の香料の使用は四千何百年以前にはじまるなどと說明されてはゞからない有樣であるが（F. Flückiger & D. Hanbury, Pharmacographia. 1879. p. 520.）その誤りであることも又言ふをまたない。卽ち上古の漢民族は黃河の上流地域に住して文化を建設し大體香料を知らなかつたはづだとしか考へられず、香の字は說文によると芳を意味し、馨とは遠くかほるなどとあり、禾本科系或はそれに類する植物を火祭として神や天にささげ、その芳しい匂ひを感じたことを表現したものと考へられ、今日我々の意味する香料を使用したことを表現したものではないと思ふ（香の字義について、太平御覽、卷九八一。陳敬、香譜。參照）そして大體前漢代に中央アジアを經由して西南アジア（主にペルシア）とインド北部地方の異なつた文化文物が傳播するにおよんで香料に接したもののやうで宋の葉庭珪が香錄の序文中（陳敬、香譜。周嘉胄、香乘。所引）に、古代には香料といふものはなく炳蕭を焚いたのみで、その煙氣はむしろ臭といふに近く、香といふ字があつてもそれは今日の香料を意味しな

い。漢以來異域との交通が開け始めて香料の名が書にのり又使用するやうにもなつた、と說くのは至極妥當な解釋である。なほ今一つ前漢末に北部インドから東トルキスタン地方を經由してシナに傳つた佛敎文化と大きなつながりのあることもいなめず、佛敎移入前は廣く用ひられるにいたつてゐなかつたのであらう（藤田、南海篇、一三四頁）といふ考へ方も一面はあたつてゐるが、北方游牧民族であるスキタイおよびその後であるサルマーテン民族の意匠の影響をうけた漢代の博山香爐もあり（原田淑人、東亞古文化研究、昭和一五年、五一三頁）また昭和一七年に蒙疆大同にほど近い陽高縣で行つた前漢中葉ごろの古墳の調査で博山香爐が出土されてをる（小野勝年、日比野丈夫、蒙疆考古記、昭和二一年）から、東トルキスタンを通じる以前に西トルキスタンから北方を迂廻して北シナにおよぶ地域に活動したユーラシヤ古代北方游牧民族を仲介として西南アジアとインドの香料がかすかに傳播してゐたことがあつたのではなからうかとも考へられる。もちろんこの博山香爐と稱する遺物が始めから我々の意味する香料を焚いてゐたかどうか、周人炳蕭、漢人始爲博山爐、而所焚惟蘭蕙ともいはれるから、始めは比較的香氣ある乾草を焚き、神仙的に海中博山のおもむきをうつしだしたと思はれる博山爐が時代が下るとともに漸次佛敎化して（B. Laufer. Chinese Pottery of the Han Dynasty. 1909. p. 174-198. 中尼萬三、西域支那古陶磁の考察、大正一三年、七七—八〇頁）遠西から流傳した香料を焚くやうになつたのは大體前漢の武帝（前一四〇——八七年）の時代をさかのぼるほど遠からぬころのことであつたらうと現在私は推定してゐる。それにしても一世紀ごろには漢書がインドの物產中に諸香・胡椒・薑をあげるとともに交阯の物產中に異香をあげ、モルツカ諸島の丁香もすこしではあるが使用した事實が認められるから、西域を通づる遠西の香料とともに、ごく少量ではあつても南海方面の香料がぼつぼつ流入してゐたと思はれる。また廣東廣西からインドシナにかけて生ずる肉桂は異文化との交涉は別として漢民族の勢力がこの地方まで波及すると——卽ち秦の始皇（前二二三——二〇六年）のころ——從來彼等が知つてゐた本土在來種の肉桂よりも優良であることが認められ、漢代以後盛んに需要するにいたつたのであるが焚香と調味に使用したことはもちろんであるとしても、その主用途は藥用にあ

つた。しかして漢民族の香料の使用が盛大となつたのは彼等の勢力が擴大して揚子江岸におよび、中央アジアを經由して入手した香料とともに南海方面からも各種の香料を直接求めるやうになつてからである。それは大體三世紀のなかごろ魏吳蜀の三國が對立した時代で、吳王孫權は魏と蜀に對抗するため南海に手をのばし使節をインドシナ南部に派遣し南方の諸物資を求めたやうであるが、それらの報告書と見られる康泰の扶南土俗傳、吳時外國傳、朱應の扶南異物志、萬震の南州異物志などは今日太平御覽や證類本草などにその斷片を殘すのみであるが、その殘文によつてさへも南海の香料に就て相當注目してゐたことが推測される。又魏略西戎傳には遠くローマ本土かと思はれる記事をのせる（宮崎市定、條支と大秦と西海、史林二四卷一號）と同時にアラビヤと小アジア產樹脂系香料のシナ傳播を物語り、從つて隋の時代には異域から輸入した香料原料を使用して匂ひをつくるのに必要な數種の技術書があり――たとへば隋書經籍志にある香方、雜香方、龍樹菩薩和香方のごとき――劉宋の范曄は和香方といふ書を撰しその序文には（――之だけしか殘つてゐない――）沈香・ムスク・零陵香・藿香・詹糖香・甘松香・蘇合香・安息香の性狀にふれてをり、又當時既に香料の保香劑としてのみ使用するある種の貝殼の粉末である甲香が香料の一種としてあげられてゐるから、西域南海經由の香料を相當用ひしかも漢民族自身の手でそれらの香料原料をもととして彼等の嗜好に適する匂ひを造る技術をもつてゐたと考へられる。なほ前記の甲香はこれだけ焚くのではきはめて臭くよい匂ひのする香料とはなし得ないものであるが、この粉末を他の種々の香料に混じると、混じた香料全體の匂ひを引立たせ安定させ長もちさせるもので、この性狀がはつきり南州異物志に記されてゐる（證類本草卷二二。太平御覽卷九八二。所引）ほどで、種々の香料を混じて立派な匂ひをつくる技術のあつたことが十分立證される。

さてインドより東のアジアの諸地方をインドとマレイシヤとシナとにわけると、香料使用の上では、マレイシヤの一帶はたとへ多くの香料を產してもインド系民族の移住により始めて香料としての價値と使用を知つたものと考へられ、シナは前記のやうにペルシヤとインドから香料を知つたのであるから、東アジアにおける香料文化の淵源はイン

ドに求められ、それが海上東南アジア諸地域へ、陸路シナへと伸びおのおの特異な發達を示してゐるやうであつてもそれらの根源には共通した一つのあるもの――文化性といふと強すぎるかもしれないが、その使用態度などに――の存在が認められる。卽ち時間をわすれがちで夢幻の世界を求め――もちろん極端な現實性もある――自然の惠みと驚異とをそのあるがままの姿に於て受容し、自然に從順な生活をつづけてゆかうとする濕潤アジヤの各住民は、匂ひもそのあるがままの姿に於てうけいれ、その鄉土に產する香料に技術的方法を加へることがすくなく、香料自體から匂ひ分のみを抽出して使ふやうな考へ方は生れず、自然に產した香料に對し經驗を重ねることに於てのみその用途を見出した。だから沈香木の香氣を火にあらず、水にあらず、色にあらず、煙にあらず、いづこよりきていづこへ去るを知らず、香氣寂然として鼻中に入るものであるといふやうに形容し、又漢民族はこの匂ひが、神明に達し、祖靈をたつとび、端氣あふれ、祥雲めぐる幽幻な妙香であると感じ佛敎的影響と道方の神仙的現實的な匂ひへの歡喜を兼備するものと見なし、香料中の最高のものと考へ、香卽ち沈（香）と西洋でインセンス卽ち乳香といふのと同じ地位においた。かくて樹脂分が木質の一部に凝結した沈香木が香料の代表であると同時に香料使用の主體が沈香木を焚くことにもなつてゐる。それから四世紀のなかごろ交阯にゐたと思はれる愈益期といふ人の牋に、一本の木の根は梅檀・節と幹は沈香、花は丁香、葉は藿香、脂（膠）は乳香と記され、代表的な香料が一本の木から生じ、その中心は沈香であると考へられてゐる。之はインドに發した考へ方の流れをくみ唐代末の酉陽雜俎にもなほこの考へ方が殘り、又唐代の新修本草は香卽ち沈香とし、この沈香の項目中に檀香・丁香・藿香・薰陸・詹糖香などを一括して說明し、宋元代の證類本草にいたつて始めて各香料をその名目ごとにわけて說明するやうになつたもののやうで、いかに沈香を中心としたかのよき證據であり、宋代に量に於ては乳香がアラビヤ人により最高に輸入されても十一世紀の丁謂が天香傳に沈香を以て宗となし乳香を以て副とすると語る有樣である。

香料を身體につける風習卽ちコスメチックスとしての使用は體臭が西方人ほど問題とはならないからあまり普及せ

す、わずかに匂ひを入れたものを腰におびる程度であるが、インドでは白檀・沈香その他の香料を粉末とし或は植物油にとかして身體に塗り、體臭と炎熱の苦からのがれることを考へ、南海の各民族は龍腦の油にムスクや沈香の粉末をとかしたものを塗る風習があつたやうで（舊唐書林邑傳、通典の赤土の條、諸蕃志の占城の項、その他に多く散見する）けがれを去つて佛を敬するとは言ひながら、現實的な塗香としての使用が廣まつてゐるのは風土の諸條件に適合しようとする努力の一端にほかならぬ。佛教の因果的な考へ方と香料との關係やその他の宗教との關聯いかんに拘らず、すべてが草木の匂ひをすなほに受容しようといふ態度であり、香木を焚くことが中心となり、コスメチックスとして生理的要求にもとづき使用しても、その匂ひを匂ひだけはなして考へ或は使用しようとすることはない。だから中世のアラビヤ文化の影響と近世の西洋文化東漸の時代にも依然としてかかる態度を繼續し、科學的に卽ち香料そのものから技術的に匂ひ分だけを抽出して使つてゆくといふ考へ方は生れず、經驗的な草木の研究が藥物との關聯に於てなされたのみである。であるから自然からとつたままでは比較的早く消散しやすい香氣ある花よりもむしろ草や木が香料使用の主體となつてゐたことも西洋と對比しておのづからうなづける事實である。

ところが香料の消費者としての存在は香料原產地の多くをふくむことにも一因するが、實に見のがせないものがある。たとへばモルツカの丁香は十六世紀にヨーロッパ人が同地にいたる前、既に元代にシナ船が直接この地に航海して丁香をつみこんで母國へ歸つた（岡本、中世モルツカ、四〇——六〇頁）有樣で漢民族の需要の强かつたことを示し、又マレイシヤ系の民族とヒンヅー族の間に强烈な酒類の賦香料として丁香が需要され、從つて一世紀ごろから元代にかけこれらの民族の誰かによつてモルツカの丁香が轉運されたのであつた。又胡椒について見ると、南宋の末期にいたり輸入量に於ては諸香料中筆頭を占めたアラビヤ產乳香と比肩すべき地位に達してゐるが、ザイトン港へ輸入される胡椒はすこぶる莫大な量で、西方最大の仲繼港であるエジプトのアレクサンドリヤに向ふ量にくらぶれば兩者の間に雲泥の相違があり、恐らく前者へ入る胡椒船百艘に對する後者の一艘よりもへだたりが大きいだらう（A. C. Moule

& P. Pelliot, Marco Polo. I. 1938. p. 351.）と傳へる十三世紀のマルコ・ポーロの言葉はそのまま信ぜられないかもしれないが、泉州が當時の盛大な西方アレクサンドリヤよりはるかに多くの胡椒船を吸收してゐたことは信じてよく、しかも當時その他のシナの港への輸入量をあはせると元代の胡椒需要がいかに強かつたかは想像にかたくない。それにつきマルコ・ポーロは元の主都燕京の住民の需要にもとづき取引される食糧品の莫大な量にのぼることを說き、その一例として毎日搬入消費する胡椒が四十三荷に達し、一荷は二二三ポンドであると云ひ（Moule. I. p. 340.）この消息を彼は大汗の稅吏より得たのであつたが、これを一年間に通算すると三四九萬ポンドとなつて後世中國の全消費量にも近く、元代の首都ならびに近傍の需要量としては首肯しがたく、かりに半減しても胡椒の消費量は想像以上であり胡椒大輸入の時代はすでにこのころ出現してゐたことが知られる。（岡本良知、支那到來の胡椒、昭和十四年、交通文化七・八號所收）かくの如く實際にはスパイスのシナの需要は大きく、東南アジアとインドについても同樣のことを言ひうるのであるが、焚香を以て香料の主體としたといふのは西洋の香料の使用と對比して香料に對する見方といふか——その民族の重點のおきどころ——特徵を强く表現せんがためであることをことはると同時に、現實的なスパイスが實際には多量に使はれてゐても香料の代表とされず、沈香を以て代表する焚香を以て香料とするものの見方は濕潤アジヤ各民族の性狀をよくあらはしてゐると考へられる。かくて漢民族は香料につき神秘的な幽玄な匂ひの世界を知るとともに、飽くことを知らぬ情慾の助成劑としての香料の使用をわすれず、香料を藥物中の最高品卽ち命を養ふ上藥——卽ち輕身・益氣・不老・延年の効果をもつもの——の部に入れ、インド人は現實の世界から夢幻の快樂にひたるつかのまの性愛の技巧にいかに匂ひを用ひるかにつき深い思ひをめぐらし、性愛と匂ひの結びつきを古くから後世までのこしてゐる。

最後に日本について見ると香料に關する限り中國の一支流に屬するものであることはいなみがたい事實である。六世紀のなかごろ朝鮮より傳播した佛敎文化の儀禮品に缺くべからざるものの一として流傳し、天平時代（七一〇——七

九四年）の法隆寺や大安寺の資材帳に記錄される香料や、正倉院に現存する巨大な沈香木（その代表は有名な蘭奢侍とよばれる）と種々の香料は佛陀の匂ひを中心とする香料生活であつた。そして平安朝に入り佛教儀禮からはなれ趣味として匂ひを味はふやうになり、たきものあはせと稱して種々の香料を調合して作つたねり香を焚きその匂ひの優劣を比較しあつたものである。このあそびは四季のうつりかはりやそれに關聯する詩歌を聯想して纖細優美でいとあまやかな匂ひの美を求めたのであるが、薫物（タキモノ卽ちねり香）の種類を大體　○春は梅花――梅の花のなつかしき香　○夏は荷葉――蓮の花のすずしき香　○秋は落葉――もみぢちるころほに出てまねくすすきのよそほひおぼゆる香　○冬は菊花――菊の花むらむらうつらふ香、露のかほりの水にうつす香　○四季は黒方――四季にわたりて身にしむ色のなつかしき匂ひ　のやうに四季の變化のなかに匂ひの美しさを求めたのである。ところが十四・五世紀になると前代の薫物とは別に種々の香料中からとくに沈香木一種をとりあげて焚くやうになつた。之はシナで六朝から唐代は現實生活の甘美の享樂であつたのが宋代に入り都市生活趣味の流行に伴ひ淸楚をむねとし華麗の美を否定して天眞の保存を欲する道家的な高踏趣味が廣まり、幽玄な匂ひを求め沈香木を中心とする焚香が盛行した反映によるものと考へられるが、沈香木の放つ香氣の種々の姿のうちに無限の思想と情緒とのつながりを見出し、香道といふ一つの高踏的な遊びにもつてきたのが、わが香道と稱するもので、以後香道が香料使用の主體をなしたから、香卽ち沈（香）といはれるやうになり、わが國の明治以前の香料は沈香木を以て代表される次第である。しかしてこの沈香を焚く香道にあつても　春香――百花の香　夏香――萬木の茂る香　秋香――もの淋しき香　冬香――雪風の如し　四季香――四季の匂ひ　とあつて、季節の變化のなかに匂ひをとけこませ淸楚な香氣のうちに無量のなにものかを覩ぜんとしてゐる。卽ち多彩な薫物から單純な沈香木に內在する匂ひの美を發見したのは平易のなかに非凡なものを求めたもので、匂ひの美を澁さの美と一致させた非凡な美への追求態度の一つであるとも言ひ得よう。それは異邦より輸入する香木が高價であつたこととと、わが經濟力が低かつたことにもよるが、自然環境が淡い匂ひのなかにその美を求めし

むるにいたつたことが大きな因子でもあつたらう。だから東西の香料を多く需要した他の文化圏における如くおほまかな大膽な匂ひの觀賞と使用は見られない。シナの流れをくみながら、それとは異なる匂ひの觀賞態度をささやかな使用のなかに發見したといふわけである。そして沈香を中心とする焚香以外には德川時代に入り若干の化粧料に香料を使つた位ひで、スパイスとしての香料の使用はほとんど見られず、從つて焚香以外に調味と化粧といふ我々の日常生活と密接なつながりのある匂ひの大きな分野に對する愛を明治以後新しい西歐の香料が入るまでほとんど知らずにすごしてきた。だから一途に焚香の主體である沈香木の美を探し求め、沈香木中の優良品である伽羅木といふ香木が最高であることをシナ人から敎はると、この伽羅といふ言葉が匂ひの最高至上な名詞になるとともに、德川時代に入ると社會生活上、この名詞が本來の沈香の優品であることを脫し廣い意味でなにごとによらずよいことの代名詞にまで使用されるにいたり (イ)これもめでたい御世故伽羅の道ともほめ申さむ――時世の表現 (ロ)薫れるは伽羅の油か花の露――有名びんつけ (ハ)立姿世界の伽羅よ今日の春、どこの伽羅樣梅の春――男女の美姿 (ニ)金看板伽羅の男と女――伊達男と女 (ホ)伽羅の下駄――上等品 (ヘ)伽羅多き人――富める人 (ト)伽羅をいふ――おせぢ (チ)伽羅先代萩――芝居の題目 のやうな言葉を殘したほどであつて、伽羅（沈香）中心の香料生活であつたことがわかる。

以上の如く考察して見ると香料の原流は各文化圏の相違によつて相當に年代上の開きもあり、使用のちがひもあり現在尙未詳に屆する問題が多々あり、私の淺學から解き得ず且つ不十分な點もあるが、その發生過程に於て大きく西洋とインドより東の方の香料の流れにわけると根本的に大きなひらきの存するものがあつて、現代の西洋の流れをくむ香料の姿に變らざるを得ない次第となつたことだけは明らかになし得たと私は思ふのである。

追記　本稿は昭和二十六年十月九日本會講座の原稿であるが當日時間の都合上この約三分の二近くを講述したのみであり、私は講演にふなれなため意をつくし得なかつたので、このたび更に補訂改稿して現在の私の考へを記した次第である。昭和廿七年七月。